

<実践報告>

## 小学校国語科書写における 学年進行に伴う学習の継続性を考慮した指導方法の検討 —授業「文字の概形」での実践から—

矢田直也 信州大学教育学部附属松本小学校  
白鳥勝教 信州大学学術研究院教育学系  
織田裕二 信州大学教育学部附属松本小学校

キーワード：書写，概形，ひらがな，ICT 活用，学習の継続性

### 1. はじめに

本論考は、小学校国語科書写における学年進行に伴う学習の継続性と学習効果に関して、「文字の概形」の学習を一例に挙げ検討するものである。

### 2. 実践対象学級における書写学習の課題

本実践対象学級の児童 36 名（3 年生）には、1 年次の初めてひらがなを学習した時に比べて、書写学習に対する学習意欲の低下が散見された。文字の書き順や読み方を教えられ、繰り返し練習する形態が当たり前の授業、担任が知識や技能を一方向的に教えて覚えさせる学習が原因となって、児童たちがひらがなに初めて出会った頃の「書いてみたい」との思いから、「教科書みたいな字形に近づけて書かなければならない」との意識へ変化させてしまった結果と推考される。このような実態から本来の書写学習が求める基本的な考え方と実践への変容、すなわち、「こんな文字を書きたい」と児童自らが願い、自身が書く文字の課題を見だし、試行錯誤しながら自分の書く文字と向き合う、「考える書写学習」を展開したいと考えるに至った。

### 3. 3 年生で「ひらがな」を学び直す意義

3 年生になり、漢字の宿題をノートに書き写す場面において児童たちの中で話題になった事柄を抽出する。

M 児：「僕、漢字はかっこよく書く自信があるんだよね。でも、ひらがなは何か変になっちゃうんだよね」

K 児：「わかる。曲がるとことか納得いかないんだよね」

M 児：「ひらがなって簡単なはずなのにね。どうして1年生の時にやったことが難しく感じるのかなあ」

当該の児童たちはひらがなの概形に関して既に学習している。その上で、3 年生という学年においては、これまでのひらがなの概形に関する感覚的な感受から、3 年生までの漢

字学習に基づき、漢字と結びつけて考える「ひらがな」の学習が展開できる。ひらがなを書くことに慣れ、多くの漢字も学習してきたとの発達段階にある児童たちにとって、漢字からひらがなの成り立ちを推測しようとする思考は、この時期の児童の中に自然に生まれるものと期待できる。漢字を学習したからこそそのひらがなの概形への新たな気づきを、3年生という時期の児童たち特有の姿として捉えることもできる。

以上のことから、「3年生」という学年は、ひらがなについてももう一度学び直すといった児童自身の学習意識が高まり、ひらがなの学び直しに適した学年と考えられる。

#### 4. 書写学習において学年進行に伴う学習内容の継続性を考慮した取り組み

##### 4.1 「概形クイズ」による書写学習

「概形」は小学校学習指導要領で第1～2学年の学習内容とされ、字形を整えるために有効な方法として活用される。自分の書いた文字に概形をあてはめ考えることで自身の課題を見いだすことができ、「自分の文字はここをこうした方がよいのではないか」との試行錯誤が児童自身の中に生まれる。児童自らが課題を持ち、考えて書字する書写学習への転換が期待できる。

しかし、低学年（第1～2学年）の児童は形概念がまだ定着しておらず、三角形や四角形、丸といった形に関して言葉での理解は難しい発達段階にある<sup>1</sup>。このように支援が必要な児童たちに効果的な学習ができると推考し、

Power Point を用いた「概形クイズ」を作成した。

##### (1) Power Point で作成した「概形クイズ」

Power Point を用いたクイズ形式で、ひらがなには6種類の概形<sup>2</sup>があることを学習する。続いて、「図1」のように、似ているひらがなでも概形が違う場合があることを学習する。

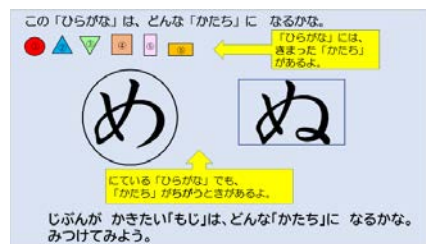


図1 「概形クイズ」(一部抜粋)

##### (2) 「概形クイズ」の提示方法

- ①「ひらがなは、どんな『かたち』でできているのか」と問い、ひらがなの「の」だけを提示する。
- ②「の」の上に○(概形)をあてはめる。
- ③『み』はどんな形かな』『す』はどんな形かな」とクイズ形式で提示していく。
- ④6種類の概形が出されたところで、ひらがなには決まった概形があることを知る。
- ⑤「め」と「ぬ」のような似ているひらがなを提示し、どのような概形があてはまるのかを問う。
- ⑥似ているひらがなでも概形が違う場合があることを知る。
- ⑦このように、ひらがなを○や△のような形で表わしたものを「概形」ということを知る。

##### (3) 1年生の学習の様子と考察

1年生の児童(35名)に6月9日に授業を実践した。どうすれば自分が「よい」と思え

る文字が書けるか問うと、「書き順を守る」「とめ、はね、はらいをちゃんとやる」「バランスに気をつける」「姿勢に気をつける」等の既習の学習要点が出された。

ここで新たに「概形」といった視点があることを「概形クイズ」を使って紹介した。「『の』はどんな形に見えるか」との問いに「丸」「円」との答えが即座に返ってきた。他の文字に対しても「縦長四角形」「横長四角形」「三角形」「逆三角形」と答えていく姿が見られた。これらの言葉がスムーズに出てきたのは、同時期に算数で「いろいろな形」の学習を行ったことが影響していると推察する。このことから、概形の指導は、算数の「形」の学習と合わせて行うことでより効果的に展開できると考える。中には、「僕の名前の『く』は縦長四角形みたいに書けば上手く書けるのかな」と、概形を自ら活用しようとする姿も見られた。「概形」を言葉で説明するだけでなく、Power Point による「概形クイズ」によって示すことで、視覚的な理解を促し、児童自身が「こんなふうに書いてみたい」との意欲を持つことに有効に働いたと捉えられる。

#### (4) 2年生から6年生までの学習の様子と考察

1年生のみならず、2～6年生の全学年（各1時間）において「概形クイズ」の学習実践を試みた。結果の要点を記す。

1～2年生（1年生35名、2年生37名）では、「概形クイズ」を通して、望ましい字形を自分でみつけようとする姿が見られた。「概形」は「こう書かなければならない」ではなく、「こんなふうに書いてみたい」との、望ましい文字を書こうとする意欲を高めるのにも有効である。

3～4年生（3年生36名、4年生36名）では、「概形」がどのようにできたのかとの問いが生まれた。これまでの経験から当たり前のようにひらがなを書くことができるようになり、また、多くの漢字も学習してきた。このような中学年期の児童たちにとって、「概形」の学習は、改めて自分の書く文字と向き合うことに有効だと考える。3年生の児童たちは、現在1人1台のChromebookが貸与されている。当該児童たちは、2年生後半から本格的に1人1台のChromebookを使い始めた。児童たちは、スライドやジャムボードを使って写真を貼り付けたり、タイピングで自分の考えをまとめたりすることができるようになっている。この時期の児童たちはICT機器の使用に慣れているので、手段の一つにICT機器を活用して、自分の文字の課題を見つけたり、過去の自分の文字と比較したりしながら、自分にとってのよりよい文字を探究することが可能である。

5～6年生（5年生34名、6年生37名）では、「概形クイズ」を通して、3～4年生と同様に、「概形」がどのように生まれたかとの問いが生まれた。3～4年生との違いは、自分自身の文字と向き合うだけではなく、ひらがなや漢字の偉大さや、文字の成り立ちの文化的背景について考えようとしていた点である。また、「概形」を通してひらがなの起源について考えた結果、点画のつながりに関する理解の深化、ひいては、書き順への理解の深まりといった他の学年にはみられない気づきもあった。「概形」との視点をもつことで、書き順には意味があり、望ましい文字を書くための大切なポイントであることに児童たち自

身で気づくことができる学年である。

「概形」は1～2年生の学習内容である。しかし、今回の全学年で「概形クイズ」を行うとの実践を通して、各発達段階によって、どのように「概形」を捉え、手書き文字と向き合っているのか、違いが確認できた。

「概形クイズ」という同じ教材を扱っても、反応は各学年によって異なる。1～2年生（低学年）は文字を書くことへの意欲喚起の時期、3～4年生（中学年）は、当たり前のように書ける「ひらがな」についての学び直しの時期、5～6年生（高学年）は、概形を通して「ひらがな」と「漢字」のつながりを理解した上で、よりよい手書き文字の担い手として、その心情を育む時期というように、書写学習を各学年の発達段階に応じた概形指導と合わせて位置づけることができるならば、書くことの学習がより深まり、日常における様々な場面で意識的に望ましい文字を書こうとする姿勢につながると考える。

#### (5)補説：保護者への実践と考察

3年生における「概形クイズ」を扱った授業は7月7日の参観日に実践した。よって、保護者（25名）も概形クイズの内容を認識していることから、その後の学級PTAの時間に、「概形を使って自分が『よい』と納得できる文字を書こう」とのテーマで保護者向けの授業を試みた。

##### ※保護者から出された感想

- A：概形をあてはめると自分の文字の直したいところがよくわかって便利だと感じた。
- B：大人になって自分の文字について考えてみることもなんてないと思っていたので、大人になってもよりよい字を書こうと考えることはよいものと思った。
- C：概形を使って自分の文字の変化を感じられるところがよいと思った。
- D：ただ書かせるだけじゃダメだということがよくわかった。
- E：子供に「丁寧に書きなさい」ということをよく言ってしまうが、自分の文字をどんなふうにかきたいのか一緒に考えることが大事だと思った。

大人（保護者）の方が夢中になって取り組んでいた。また、DやEの感想からは、自身の子供に「ただ書かせていた」や「丁寧に書きなさい」といった声かけをしていた点への振り返りも相俟って、望ましい文字を書く際の要件の一つとして、概形を認識した書字のよさをより感受できたと推察する。

#### 4.2 「概形チェックスライド」を使った書写学習

本節では、前章で記した3年生でのひらがなの学び直し、及び、前節で述べた児童自身の書写学習への主体的な取り組みの一例として、ICT機器を活用した「文字の概形」に関する学習実践を紹介する。

##### (1)Chromebook による「概形チェックスライド」

前節の1年生での書写学習の実践例に用いたICT教材は、児童たちの概形に関する視覚的な理解を促すために教師が作成したものである。一方、3年生の児童たちはChromebookの活用が自身でできるという実態を書写学習に生かして作成したのが「概形チェックスラ

イド」である。

なお、「概形チェックスライド」を児童自身が作成する際に注意を要することは、このスライドは何のために作成するかという点である。当該のスライド作り自身が学習の目的になって本末転倒である。本学習の目的は、望ましい文字が書けるようになることである。この「目的」に向かうための「手段」として、「概形チェックスライド」があることを、児童教師ともに共通の認識として取り組むことが大切である。

## (2) 「概形チェックスライド」の活用方法

- ①自分の書きたい文字を決める。
- ②鉛筆を用いて自分で書いてみる。
- ③書いた文字を写真で撮る。
- ④「概形チェックスライド」に貼り付ける。
- ⑤概形をあてはめ、自分の課題を見つける。

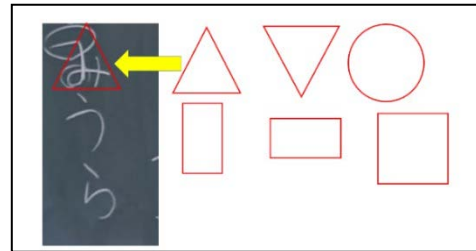


図2 「概形チェックスライド」の一例

(自分のチェックしたい文字の概形を写真の上

移動する。実際に書いた文字と概形を重ねることで、自分の書いた文字の課題が視覚的に明確になる。)

- ⑥自分の課題を解決するにはどうすればよいか考える。
- ⑦鉛筆を用いて再度書いてみる。

更に、スライドには自動保存機能がついており、前に書いた文字と新たに書いた文字を簡単に比較できることから、自分の成長を自覚できることにも期待できる。

## (3) 3年生の学習の様子

3年生での授業では、「どうすれば自分の納得のいく文字が書けるか」との学習問題を設定した。「概形チェックスライド」を使った学習は初めてだったので、1時間、「図2」にある「み」を使って活用方法をクラス全員で確認した。この使い方の学習を通して、「コメント機能に自分の課題を書きたい」「最初に書いた文字と次に書いた文字を並べて貼り付ければよくなったところがわかりやすい」「スライドにあるような概形の書いてあるプリントがあれば、そこに書いて練習できる」といったアイデアが児童たちから出された。本学習において、児童たちは、自身がよく書く文字である自分の氏名に使われる文字をそれぞれの題材として選んだ。

## 5. 本実践対象学級児童（3年生）の取り組み事例

### 5.1 事例1：U児の取り組み

U児は、「概形チェックスライド」を使って、自分の書いた「く」における課題を「折れの部分と字形のバランスにある」と見いだした上で、「く」の概形である縦長の長方形に収まるように書いてみようと考えた（「図3」）。

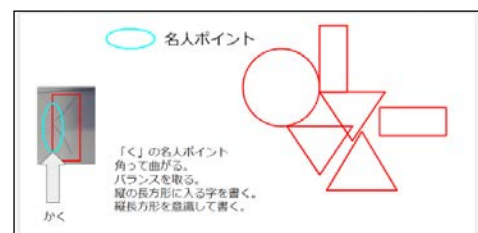


図3 U児の例

### 5.2 事例2：W児の取り組み

W児は、自身が書いた3枚の「わ」を「概形チェックスライド」に貼り付けることで、概形に当てはめた「わ」3種の比較を試みた。概形に当てはめたことでわずかな変化に気づけている。

「まとめ」に「最後は、なっとくいく文字ができて 嬉しかったです」と記し、自身が書く文字の変容を自覚している（「図4」）。この日の日記には、「がいけいを使うと、自分の文字のなおした方がいいところが分かった。自分の文字がどんどんよくなっていくのが分かってうれしかったし、楽しかったです」と書いて学習を振り返っている。

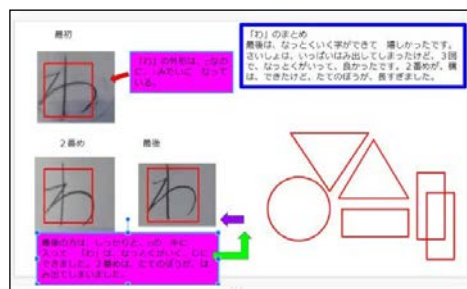


図4 W児の例

### 5.3 事例3：K児の取り組み

K児は、自分の名前に使われる「な」を選び、自身が書いた「な」を「概形チェックスライド」に貼り付けた上で「な」の概形である三角形を当てはめ、自己の課題を見いだしていった。続いてK児は、2枚目のスライド（「図5」）に「概形当てはめプリント」（「図6」）を使って自身が書いた4つの「な」を並べた。このプリントは、前時に児童たちから出された「スライドにあるような概形の書いてあるプリントがあれば、そこに書いて練習できる」とのアイデアを受けて教師が作成したものである。「概形チェックスライド」を使う、すなわち、ICT機器を活用して課題を見だし、「概形当てはめプリント」に実際に書いてみる。その上で書いた文字を新たなスライドに貼り付け（=ICT機器の活用）比較することを通して望ましい字形を選ぶに至った。

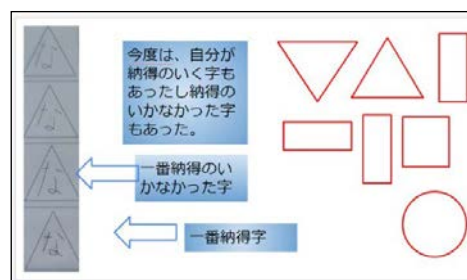


図5 K児の例①

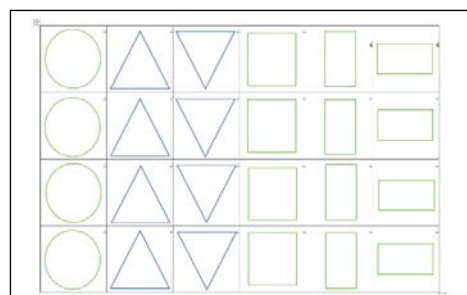


図6 K児の例②

### 5.4 事例4：A児の取り組み

A児は文字を書くことに困難さを感じている児童である。特に、教科書の教材文字を認識し近づけて書き写したり、字形を整えて書いたりすることが苦手である。書写の学習になると、「私は文字が苦手だからやりたくない」と言っており、自分から取り組む姿は見られなかった。一方、休み時間に4コママンガの文章を書いたり友だちに手紙を書いたりすると、書くことに対して意欲的な面も見られた。この姿を支えているのは、A児自身から生まれる「こんなふうに書いてみたい」という願いだと推察する。こうしたA児の姿から、これまで担任教師が行ってきた書写学習では、「このように書かなければならない」といった指導面が強調され、本来A児が持っている書くことに対する積極的な面を失わせ、「書写学習は



苦手なことをやらされる時間である」といった意識をより強く抱かせてしまったと推考する。

しかし、今回の「概形チェックスライド」を使った取り組みは大変意欲的に取り組んだ。A児はICT機器の活用に優れている。担任教師は、A児が今回の「概形チェックスライド」に興味を持ち、自分の書いた文字の課題を見つけ、少しでも書くことへの苦手意識を解消してほしいとの願いを持っていた。

実際のA児の学びは、「概形チェックスライド」を使うだけに留まらなかった。A児は、自分の名前に使われている「か」を選び、「概形チェックスライド」にあてはめると、「私の文字は中心がずれている」と自分の文字の課題を見つけた。続いて、「先生、ここに大きめのマスを書いて」と自分のノートを持ってきた。担任教師が赤いマジックでマスを書くときと黙々と書き始めた（「図7」）。

一文字書き終わると、概形を見て、丸や二重丸、花丸を付けながら（「図8」）、自分の書く文字を自身で評価していった。納得のいく「か」が書けると、次に自分の名前に使われている他の文字にも取り組んでいった。最後に取り組んだ「り」では、「この『り』は、隙間が空きすぎて、縦長の四角形になってないからダメだ」と概形をイメージしながら書いていた。「隙間が空きすぎて」に関しては、本来「概形」ではなく「画間」にかかわる学習内容であるが、A児にとって、画間に着目する一つのステップになったことは確かである。このよ

うな学習の結果、「ここの隙間が完璧に書けた」「今まで書いた『り』の中で一番よく書けた」と嬉しそうに自分の書いた「り」に花丸をつけた。さらに、「今度は『〇〇(=本人名前の漢字表記)』っていう漢字でもやってみたい」と、自分から書こうという意欲を高めていた。



図7 A児の学ぶ姿

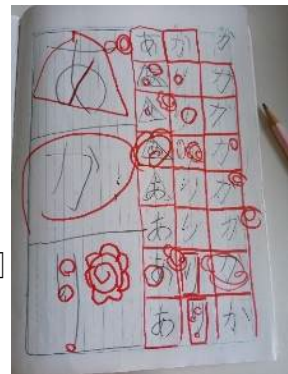


図8 A児の学び

## 6. 考察と課題

### 6.1 考察

本論考では、「文字の概形」の学習及び指導事項を例に挙げて、小学校国語科書写における、学年進行に伴っての学習の継続性と学習効果に関して検討した。令和2年度完全実施「小学校学習指導要領」の「第2 各学年の目標及び内容 2 内容」で「点画の書き方や文字の形に注意しながら、筆順に従って丁寧に書くこと。」と記されているのは「第1学年及び第2学年」であるが、当該の学習内容は第1及び第2学年のみで指導されるわけではなく、継続しての学習が展開していくのは当然のことである。前の段階での学習内容及び指導事項を次の段階の学習内容及び指導事項で示される資質や能力の育成の中でどのように効果的に継続するかは重要な観点であり、その際、児童生徒の発達段階の熟慮は必至

となる。本論考で扱った「文字の概形」もその一例として挙げられる。特にひらがなの学習に関しては、文字学習入門期でのひらがなの学習を経た後に生じる、いわゆるひらがな学習低迷期の際に、漢字の学習とひらがなの成立に関する学習とを絡めて展開すると、ひらがな自身を見直す好機が訪れ、学習の質の変化を引き起こすことが可能になる。本論考では、展開方法の一つとして、ICT 機器の活用を試みた。

本論考での事例から、3年生の児童たちが漢字の学習に鑑みながらひらがなの概形に着目することで、児童自身が書いた文字における課題を見だし、「その課題をどのように改善すれば望ましい字形になるのか」と試行錯誤する姿が見られた。「概形チェックスライド」に当てはめて課題を見いだすことから、「概形チェックスライド」に書いた文字を並べて変化を比較したり、自分の書いた文字に手書きの概形を当てはめて考えたり、概形の中に文字を書いたり、児童たち一人一人に各々の試行錯誤する姿が生まれた。この試行錯誤を通して、自分の書いた文字の課題を解決する面白さや納得のいく文字が書けた喜びを感受していた。このような姿は日々の学習において望まれるものである。こうした学習意欲が、「こんなふうに書きたい」等といった、書くことに対して主体的に臨む姿勢につながると考える。実際のところ、3年生で改めてひらがなの概形に着目した学習を展開した後、児童たちの中には自身が書く文字への向き合い方に対しての変化が見受けられた。

文字を書く場面は日常生活のあらゆるところに存在する。教師は、児童たちが学び習熟したことを書写学習の中だけで完結するのではなく、児童たちのこれからの生活における、文字を書くあらゆる場面で生かしていける力を保証することが求められる。教師には、児童たちの自発的な学習意欲や、「望ましい文字を書きたい」との願いを実現できる力を育成する責務がある。

なお、本論考では、「文字の概形」の学習における、学年進行に伴う学習内容の継続性に関して考慮した指導展開の一例として、試みに ICT 機器を活用した。ICT 機器の持つよさをよりよい書写学習のための手段として活用しようと検討した結果、発達段階をふまえた「文字の概形」の学習展開例を提言できたとも考える。

## 6.2 課題

本論考での出発点として、本実践対象学級の児童たちが、これまでの書写学習において、「小学校学習指導要領」第1及び第2学年の学習内容である「文字の形」の十分な理解が成されていたかとの問題点は存在する。

本論考における児童たちの姿から、教師は、児童たちの現在の姿、眼前の実像を捉え、このような現況の児童たちがどのように学ぶのか、かつ、どのような姿に成長するのかを具体的にイメージしながら学習展開を構想していくことが必要である。その中で、3年生における本実践を、4年生、5年生、6年生へとつなげていくことも大切なことである。「文字の概形」の学習のみならず、小学校1～6年生全学年にわたっての、書写学習に関する体系的な学習展開については、これからも恒常的な課題として取り組んでいきたい。

また、本授業で検討した ICT 機器活用を一方法とした展開は、これまでの書写教育の中



でも ICT を使わずとも同様な内容が実践されているところ、本論考によって、ICT を活用しても実践できる、ICT を用いるとより関心を持って学習者が学習に取り組めるという展開例として捉えることもできる。書写学習においての、ICT を用いた学習（指導）方法と、これまで通常行われてきている学習（指導）方法、それぞれの特性と効果的な活用方法についてはさらに重ねての考察を要する。

## 注

- 1 川崎正盛・村上良太・妹尾進一・木村恵子・高淵千香子・山中法子・内田武瑠・松浦武人・植田敦三（2011）。「論理的な図形認識を促す算数・数学科カリキュラムの開発（2）—図形の性質の意識化に焦点を当てて—」『数学教育学研究』（全国数学教育学会）17(1)pp.61-71；妹尾進一・村上良太・鈴木昌二・川崎正盛・高淵千香子・山中法子・内田武瑠・松浦武人・木村恵子・松浦武人・植田敦三（2013）「論理的な図形認識を促す算数・数学科カリキュラムの開発（3）—4年間の追跡による生徒の論理的な図形認識の変容についての考察—」『数学教育学研究』（全国数学教育学会）19(1)pp.89-102.
- 2 全国大学書写書道教育学会編（2020）『国語科書写の理論と実践』 萱原書房. p.32.

## 謝 辞

本論考は、令和4年度信州大学教育学部学部長裁量経費プロジェクトの助成を受けて実施したものである。

## 文 献

- 川崎正盛・村上良太・妹尾進一・木村恵子・高淵千香子・山中法子・内田武瑠・松浦武人・植田敦三（2011）「論理的な図形認識を促す算数・数学科カリキュラムの開発（2）—図形の性質の意識化に焦点を当てて—」『数学教育学研究』（全国数学教育学会）17(1)pp.61-71.
- 妹尾進一・村上良太・鈴木昌二・川崎正盛・高淵千香子・山中法子・内田武瑠・松浦武人・木村恵子・松浦武人・植田敦三（2013）「論理的な図形認識を促す算数・数学科カリキュラムの開発（3）—4年間の追跡による生徒の論理的な図形認識の変容について考察—」『数学教育学研究』（全国数学教育学会）19(1)pp.89-102.
- 全国大学書写書道教育学会編（2020）『国語科書写の理論と実践』 萱原書房. p.32.

(2023年10月11日 受付)

(2024年 1月16日 受理)